巻頭言

# 本学会のこれから

編集理事　伊賀健一

電子情報通信学会がカバーする産業分野のこれからの消長はいかがであろうか.

エレクトロニクス分野の一角をなす家庭電化製品，テレビジョン受像機などの一般的電気機械は既にアジア諸国に生産の中心が移り，韓国などは既にもう生産が減少し始めている．コンピュータ生産もしかりである．半導体そのものにしても近隣諸国の追い上げが激しい．一方，米国の巻き返しも急で，最先端 CPU の提供などは追随を許さない．付加価値の高い商品開発が必然だが，それもすぐに価値を下げてしまう.

情報分野は最も先を行く米国に水を開けられているようだ．いろいろな仕組みの展開に規制が邪魔をしていることはよくいわれるところで，状況は依然として明るくない．ソフトの開発にしてもインドが優秀な人材と低賃金を梃子に急成長中である．中国のソフト開発潜在力の大きさはいうまでもない.

通信はこれまで最も国内で保護されてきた分野であった．しかし，電気通信事業法の改定も 10 年目を迎え，ハードウェアの国際調達，安い国際系キャリヤの登場，より競争が激しくなる携帯電話の普及，インタネットのようなクローズネットワークの広がり，社会基盤整備と分割による競争の矛盾など，通信有史以来の波乱が予想される.

このようにみてくると，本学会の取り巻く環境は決して安寧ではない．しかし，本学会も日本社会の縮図であって，意思決定のスピードはじれったくなるほど遅く，非合理制がなかなか改善されない．ソサイエティ制が本年 4 月から発足したが，下手をするとピラミッド構造がもう一つできただけということにもなりかねない．一方，会員が多大の時間を費やしてその運営に当たっているその量と質は他国の学会の比ではない．かく言う筆者もこの 2 年間編集理事の一人として編集関係の合理化に務めてきた．4 月から始まろうとしている論文誌の投稿・体裁合理化，掲載別刷り代金の低減などに多少のお役に立てたと思う.

本学会の関連分野発展と本学会の繁栄を真に願うには，守りに入ってはだめであろう．考えられる限りの合理化，学会運営の努力が効率よく反映できるような仕組みの改善などを怠ってはなるまい．これからグローバルに勝負できるのは，繊細な感性を生かしたサービスを基調とする電子，情報，通信の展開であろうし，学会はそれをリードする役目を強く認識すべきである.